＝＝＝　日程第４　一般質問　＝＝＝

○議長（村松　　積）　日程第４、一般質問に入ります。

今回は６番、宮嶋清伸君、４番、宮嶋怡正君、１番、小池昌人君、２番、串原寛治君、３番、金田憲治君、以上５名から通告されております。

◇　宮　嶋　清　伸　◇

○議長（村松　　積）　６番、宮嶋清伸君、質問を許します。登壇願います。

宮嶋清信君。

○６番（宮嶋　清伸）　６番、宮嶋清伸です。

先日、下條村の行政視察が３００件を超え、いまだ視察要請が絶えません。また、４月からは福島県の泉崎村職員が下條村を学ぶため、半年間実習にくるなど、まだまだ下條村は全国から注目される自治体であります。

そこで今回私は、その下條村がより一層輝く下條となる提案をして、村長のお考えを聞くものです。

まずはじめに、子供の学力向上について３つ質問します。

下條村は、独自の教育ソフトを導入しておりますが、学校での取り組み、図書館での貸し出し状況などはどのようになっているかお聞きします。また、「教育ソフト導入促進するため、パソコンの普及についても村で考える」と以前答弁がありましたが、どのようになっているかお聞きします。

次に、学童のあり方について質問します。

現在の下條村の取り組みでは、学童保育は福祉課が担当しており、小学３年生までの児童を保護者の代わりに保育する保育園の延長であり、学童クラブは教育委員会が担当し、長期休みの間、保護者が仕事で不在の小学４年生以上を見守るものとなっておりますが、下條村には多くの教員退職者がいますので、その方にボランティアで教育をする施策を導入したらと思いますが、村長のお考えをお聞きします。

学力向上施策の最後の質問としまして、今まで述べた教育ソフト、学童保育、クラブを福祉課、教育委員会の枠を超えた下條独自の施策で、下條の子供が東大へ現役で入学できるような学力向上施策を提案します。

このことは現在、地方の医師不足にも近因しており、医師の子供が医学部に行くには学力をつけなくてはいけないが、地方ではなかなか難しく、奥さんとお子さんを東京において単身赴任できていることが多く、そのために短期で医師が帰ってしまうケースがあるとお聞きしております。そこでこの下條村で学力向上施策を進めることで、自然豊かな下條で学力向上ができれば魅力を感じ、ここで子供を育ててみたいとなると私は思います。

現に教育現場では、飯田高校のラグビー班は、湯沢監督の文武両道の指導により、花園に出場した現役の３年生が、信大の医学部、筑波、早稲田に合格し注目されていますが、そのような施策を行えば子育て支援に続き、下條村の第２弾となると私は考えますが、村長のお考えをお聞きします。

続きまして、２つ目の南信州広域連合の課題について３つ質問します。

まずはじめに伝統文化の伝承についてお聞きします。

下條村の取り組みとして、伝統文化である歌舞伎などには力を入れておりますが、現在まで受け継がれている身近な下條の伝統文化である地域のお祭りや獅子舞、おはやし、近年では村内唯一となってしまった粒良脇の盆踊りなどを村としてＰＲして、観光客の誘致や村民への参加を呼びかけ、さらには南信州全域で伝統文化の伝承を推進する施策を提案して、村長の考えをお聞きします。

このことは、三遠南信自動車道やリニアなどの開通を将来に考えたとき、この南信州に観光客が魅力を感じ、来たくなる、そんな地域にしていかなくてはいけない大きな課題だと私は考えますが、村長のお考えをお聞きします。

次に、老人介護についてお聞きします。

今後、全国的、世界的規模で深刻化を増す少子高齢化に対し、下條村では保健師を中心に介護を必要となるお年寄りが増えないように、脳刺激や健康体操などに取り組んでおりますが、年々増加傾向の南信州の特養老人ホームの入居待機者の推移と今後の予測、そして南信州広域連合の今後の課題について村長にお聞きします。

最後になりますが、今年度より導入された南部公共バスについてお聞きします。

先日、新聞等で発表がありましたが、下條村もアンケート時には多くの利用希望者がいましたが、実施したところ、極端に少ない利用者しかいないとの結果でした。３月末を持って信南交通の路線が廃止となり、代わりに南部公共バスの路線を増便し、公共交通網の

確保を行いますが、この半年間の南部公共バスの利用状況、今後の課題、また南信州全域の公共交通網の今後の取り組みについて、村長のお考えをお聞きします。

以上で質問を終わります。

○議長（村松　　積）　伊藤村長、答弁願います。

伊藤村長。

○村長（伊藤　喜平）　宮嶋議員の質問にお答えいたします。

最初は教育に関する問題でございました、その次には伝統文化、それから高齢者対策の問題等いずれも今の世の中にもっとも重要視される問題でございますし、一番問題になるところでございます。

私も皆様方のご協力をいただいて、この職に長らく就かさせておっていただくわけでございますけれども、村づくりの基本とはなんぞやということで、何回も何回も考えることがございました。結論といたしまして、村づくりは人づくりであるという結論に達しており、今それに向かって邁進しておるところでございます。

人づくりとは一概にどういうものかということでございまして、これは非常に広い意味でとらえると難しいものでございますけれども、唱えることは簡単でございます。今の世の中は総論ばっかり言っておって、もう話にならん。具体的に何をするかというと、それは別の問題として理想論ばっかり述べて、そしてそれに対して理想通りにいかないと不平不満を鬱積させて、それが変な世論として出てきてしまう。これは国の世論、県の世論、村の世論もあるんですけれども、そうしてみんな不毛の論議ばっかり重ねておるというのが今の現状ではないかと思います。

そこで人づくりというのを具体的にやってみますと、やはりそこにおいて機関をなすものは教育であろうかと思います。教育といってもまたこれは広いもんでございまして家庭教育。これも大きく人づくりには作用します。そのときに幼児教育、学校教育、社会教育、生涯教育といろいろあるわけでございますけれども、その中で行政が特に注意しなければいけないのは、学校教育の分野であろうと思います。ところが、今その学校教育の分野においても、これ正常過程にあるといえばそれまででございますけれども、非常に猫の目行政に、昔は農水省、今でもそうでございますけれども、猫の目行政の代表というと農水省でございましたけれども、今文部科学省も匹敵するほどなかなか教育の方針がぶれるわけ

でございます。一時はゆとり教育なんていう問題も出ました。

それから学力が低下してどうしようもないということで、今度はまた昔の教育に戻ったわけでございますけれども、教育の理念というのはそんなに変わるべき問題ではないと思いますけれども、この辺で収まっていただきたいなと思っております。

そこでいろいろの具体的な問題についてお答えいたしますけれども、教育ソフトの普及についてが１点でございます。この教育ソフトにつきましては、私どもも信州大学教育学部と契約いたしまして、それにもって進めておるわけでございます。

保育所での状況でございますけれども、現在保育所には２台のパソコンがあります。各保育施設での使用はできないのが実態でございます。興味のない子もいたり、パソコンがおもちゃ代わりになってしまい、それから集団での使用はできていません。現在は、希望する子供たちがいたら、提供する方法をとっています。また、家庭でお母さん方の中には、パソコン使用を禁止している家庭もあり、取り扱いに非常に苦慮しておるというところでございます。

次に、図書館での利用でございますけれども、２０年度には３１６人、２１年度２月末でございますけれども、１５７人となっております。

図書館よりの貸し出しについては、２０年度は６２人、２１年度は同じく２月末でございますけれども、７人となっております。

小学校での利用でございますけれども、クラスによって違いますが、一週間に１時間、１カ月に２時間から４時間のパソコン教室を利用し、ドリルの勉強や単元の終わりの復習、担任教師出張のときの自主授業等に行っておるところでございます。

中学校での利用でございますけれども、特別支援学級で月に１回から２回使用しております。２年生の数学で補助的に利用しておるところでございます。

今、この件についてアンケートもとっております。機材でございますけれども、まず機材の整備をしなければいけないということで、コンピューター学校とも相談いたしまして、コンピューター学校の中古を安く分けてくれるということでございますけれども、なかなか申し入れが少ないということでございます。

もう１つは、役場等で古くなって買い換えたのがありますけれども、これに対してどうしても中の内部資料が残ってしまうということです。それを消すにはなかなか大変かなと

いうことで、苦慮しておるところでございますけれども、いずれにいたしましても、今度アンケートが間もなくまとまってくるわけでございますので、そんな方向でまた次の段取りをしてみたいと思っております。

２番目に学童保育のあり方、この指導のあり方について質問がありました。

これはお話のように、担当部署が福祉課、年少の時分は福祉課、それから大きくなってくると教育委員会というふうに分かれてしまうわけでございますけれども、学童保育は担当は福祉課でございます。小学校低学年を対象に、家庭に子供たちを見る人がいない場合入所し、教育的指導はいたしません。いわゆる「鍵っ子」対策を主に運営しているのが実態でございます。

年々希望者が多くなっておりまして、ちなみに学童保育児童の推移を見ますと、１９年度は２０人プラス夏休み８人。２０年度は２７人プラス夏休みが９人。２１年度が３２人、プラス夏休みが１０名。２２年度予定は、３６名としております。

次に、学童クラブでございますけれども、担当が教育委員会でございます。小学校４年から６年の日中、保護者が家庭にいない児童を対象として、さらには小学校の夏休み、冬休み、春休みの日曜祭日を除き、午前８時から午後６時まで負担金は夏休み５千円、冬休み１千円、春休み２，５００円をいただいて行っております。

内容はまず宿題を行い、あとは小学校体育館、ミーティングルーム、小学校プール等を使い、子供たちが自由に行動するのを見守っております。ここに教員ＯＢを入れたらどうかということでございます。私どもも一時考えたことがあるわけでございますけれども、なかなか実際はいろいろ問題があります。問題があるといって避けておっては進まないわけでございますので、今回また新たに見直してみたいというふうに思っております。

この他補助する下條村の学習塾がございます。公文でございますけれども、ＪＡパーク２階でやっております。火、金曜日にやっており、２歳から高校３年までを受けつけております。英、数、国でございまして、８０人が今受けておるそうでございます。１学科１カ月６，３００円でございます。もう１つが泉塾下條教室ピグマリオンコースということで、村民センターでやっております。週３回でございまして、小学校１年から４年までございます。これは算数でございまして、２０人受講しておるそうでございます。１～２年が月に７，８００円、３～４年が月に８，１００円ということでやっておるわけでござ

いまして、合計１００人の人が塾を受けておるということでございまして、なかなか今の世相というのは大変かなと思っておると同時に、こうした皆さんともまたよく話し合いながら、一番いい方法に進んでいきたいと思っております。

３番目に学力向上施策というのがございました。

小学校の学力向上施策といたしましては、月曜日と木曜日に８時２０分から３５分まで１５分間、朝の時間として読書の時間をやっております。火、水、金の１時５０分から２時５分までのやはり１５分間、読書の時間として月曜日と木曜日については、算数と漢字のドリルの時間としてやっております。

漢字検定の希望者を募集し、小学校を試験会場として２０年度は１６０人、全体児童は２９３人おるわけでございますけれども、約半分くらいを受けました。２１年度は、１４０人。全体児童が２８７人でございまして、若干落ちております。受験者が落ちておるということでございます。

中学校での学識向上施策としては、２０年より毎週金曜日に１時４５分から２時１０分の２５分間を「はげみ」の時間として、学力向上の時間と位置づけて基礎学習、計算力、単語力等の定着を図る時間を設けております。さらに漢字検定、数学検定、英語検定の受検を奨励し、中学生に励みを持たせるようにしているところでございます。

また、毎週月、火、木の週３回、８時１０分から２０分の１０分間の読書を行っているところでございます。

小・中共通の学力向上施策といたしまして、ＮＲＴ学力検査、これは株式会社図書文化社が全国規模で行うテストでございますけれども、小学校については２年生から６年生について、国語と算数を行っております。２２年度予算といたしまして、１５７，４４０円を組んだところでございます。

中学校については、１年生は国語、社会、数学、理科、２年生は国語、社会、数学、理科、英語を行うことになっておりまして、２２年度予算に２９９，５６０円をつけたところでございます。

なお、ＰＤＣＡサイクル事業ということで、長野県教育委員会が行う事業でございますけれども、小学校５年生、国語、算数、中学校２年生、国語、算数、英語について行っております。これは無料でございます。

小中学校ともＮＲＴ、これは先ほど申し上げましたように株式会社図書文化社が行っておるところでございます。それとＰＤＣＡ、今の話でございますけれども、の結果について分析し、対策を検討し、以後の学校指導に反映させておるところでございます。

下條村学校教育全体講師の活用として、２２年度より小中連携及び学力向上の方法として、学校全体講師の活用を計画しております。

詳細にわたっては、また協議会で申し上げます。

それからなお、全国学力実態調査が２２年度からは小学校６年、中学校３年生について全国で抽出方式となるようになっております。抽出校に選ばれれば、これに参加するということでございますけれども、私はなぜこれ抽出するかということでございます。少しくらいかかっても全国の小中学校で学力テストをやって、そしてその評価をよくわきまえて、どこに地域差があるとすればどこに問題があるとか、学校差があるとすればどこに問題があるかということを、その冷静に冷徹に粛々と分析しなければいけないということでございます。先生方も非常に抵抗があるそうでございますけれども、教師、人にものを教えるということはどのくらい自分の情熱が生徒に伝わっておるかということは、これは喜んで受け入れなければならないことでございまして、第三者が公平な手段としてきっちり教えた生徒は「先生こんな形で頑張ってくれましたね」とか「どっか先生問題があるんじゃないか」ということをオープンにしてやることも学力の向上につながることでございますし、やる気のある先生の励みになることであろうと思います。

人はやはり目的を失ったときに情熱も失うわけでございまして、子供たちの教育というのはそのほとんどが情熱である。情熱に左右されるとこが非常に多いと思いますので、そんなことも私はこの機会あるごとに提案してまいるつもりでございます。

次に、伝統文化の伝承でございます。

これは今、子供さんを含めて社会は非常に心が渇ききってしまっておるわけでございまして、伝統の歌舞伎を見たり、それから若者が一生懸命やっておる村吹を見たり、いろいろするところでやはりこの心の渇きというのを潤いに変えていかなければならない。その大きな意味あるわけでございまして、ご指摘のように下條村の伝統文化としては下條歌舞伎、これは今定期的にやっております。特に１１月の定例歌舞伎においては、首都圏下條会の皆さんもそれぞれの車でまいって期待してきたところでございまして、十分堪能して

いっていただいたと同時に、残念なことにはちょうどその時に新型インフルエンザということで、子供歌舞伎が上映できなかったわけでございます。ここのそのフォローとして、ここ３日ほど前に上映し、なかなか大勢観客の皆さんが出てきていただいて、感動の一瞬でございました。

このほかに大山田神社の獅子舞、それから入登山神社の浦安の舞とか、神明社の屋台獅子だとか、指摘もありました粒良脇地区の盆踊りということでございまして、私たちは何もなかった時分には盆踊りというのは非常に楽しみ。それから盆と盆踊りというのは非常にマッチングして、何となく風習があったわけでございますけれども、今残っておるのは粒良脇の盆踊りだけでございます。保存会の皆さんのご努力に感謝申し上げるとともに、これから何とか具体的に、例えばそいじゃあそこで綿あめをいくらでもやるから子供さんたちの出てこいとかいうような費用くらいは村でやって、勢いをつけてやらなければいけないなということでございまして、これらについてもまた地元の皆さんとよく相談して、必要とあらば補正で頑張っていくつもりでございます。

それから若者のよりどころとして、下條村吹、村民吹奏楽団があるわけでございますけれども、もう技術としては相当高いところにいっておりますし、またあれを中心として若者も励みだとか、勇気が出るわけでございまして、これらも本当にそのリーダーにも感謝申し上げるとともに、これからも末永く力強い支援をしていかなければならないなと思っております。

それから宮嶋議員が発起人で始めていただいた「しもじょっ子祭り」も、やっと定着してまいりまして、大きなイベントとなったわけでございます。あの中で何かその核になるものも見つけて、そしてそれを新しい文化だとか、新しい風土として、下條村独自のものだんだんこの作っていきたいなと思っておるところでございますので、ぜひそんな面で若者の皆さんと一緒に相談して、最初からそんなにうまくいくはずはないわけでございますけれども、回を重ねるに従って定着して「ずいぶん良くなったな」と、カッセイカマンもこれも頑張っておっていただきますけれども、その歌舞伎とカッセイカマンと村吹とその間で何かやれということ、なかなか難しいわけでございますけれども、やはり何とかチャレンジしていただければ、私どももまた頑張らせていただくというつもりでございます。

最後に老人福祉の問題について質問がありました。

これは本当に世界的規模で地球的規模。特に日本は、地球上でも一番高齢化が急速に来ておるということでございます。そしてまた環境も良くなり、環境というのは福祉環境も医療関係も良くなるということでございまして、長寿化社会になっておるということでございます。長寿化社会は非常にありがたいことでございますけれども、反面、医療、福祉については相当出費をしなければいけないというのは、私たちは覚悟しなければいけないし、それは私たちの世代できっちり対応する義務があるわけでございますので、そんな心構えでやっておるわけでございますけれども、スケールが非常に大きいということでございます。これは広域の中でも大問題として、県も含めて今広域行政の中でもきっちりと将来を見通して計画を立っておるわけでございますけれども、それ前の段階として実績を申し上げておくならば、待機者、入所待機者でございます。これは待機者という名前がいいのか、入所予約者といった方がいいのか、いろいろの観点があります。というのは、入所判定をするのは広域で公平、公正の立場でやっております。

さあそろそろ例えば介護度２の方がおったとするならば、「そろそろあなたの番が来ますよ」といったら「もうちょっと送ってくれ」と。そしてそれじゃだんだんやっていくと「もうちょっと送ってくれ」と「そいじゃ私が入る」というような場面があるわけでございまして、まともに数字、ちょうどあのバスはバスのところで言いますけれども、なかなか世論というか、アンケートをとってみてそれが正しいか、正しくないかという見方も今の世相としてはなかなか難しくなっておるわけでございますけれども、待機者がおることは間違いございません。

そこで１９年度末には、６９１人、待機希望者がおるということで２０年度末には７６５人、前年度より７４人増えております。２１年度末には８１６人ということで、前年より５１人の増となっております。

今後の予測といたしましては、これはどうしても年々増えていくということは避けて通れないと思います。その中に希望者もおるということでございますけれども、そんなことといっておっても始まらないわけでございますので、広域としては長野県全体の広域プランというのがございます。それで南信州広域も含めまして、県とよく打ち合わせしてやっておるわけでございますけれども、Ｈ２３年度までに介護老人福祉施設は１６施設で今まで９４２名の定員でございましたけれども、これを９２床増やしまして１，０３４床。介護

老人保健施設７施設で６４０人であったものが７９名増やして７１９名。介護療養型施設では６施設で２１０床あったのが２３０床ということで、２０床増やします。計１９１床の増床となります。

これらの実績を踏まえて、また県との全体協議の中で、２４年度に向けてやっていくつもりでございます。

それから南信州広域連合のバスの問題がありました。

これは今まで信南交通が本当に頑張ってやっておっていただいて、お客様少なくなる。便を減らす。不便になるからまた少なくなるという、悪循環でやっておりました。今の状況はまず空気を運んでおるような状況でございまして、信南も相当の赤字をしております。そのことについて、我々も存続をお願いした限りは補てんしてやらなければならないという義務があるわけでございまして、バスをうんと走らせると赤字になっちゃうと、それはそれでバス会社考えろというような風潮が全般にあるわけでございますけれども、そんなことが長続きするはずがないということでございまして、広域全体でもよし最低の線だけは補てんしやろうということで今までやっておったわけでございますけれども、それとて信南交通は補てんしてもらってあうような状況でないわけでございまして、今日まで頑張ってくれたということに心より感謝しなければいけないということと、当地方は先ほど申しましたように、コンクリートから人へというには非常にまだまだ早い時代でございまして、公共交通機関というのはほとんどないわけでございます。

そこで今度南信州広域連合の中で、それぞれのゾーン、下伊那南部地域、西部地域、北部地域で地域に密着した交通形態を作ろうじゃないかということで始めたのが南部公共バスでございます。昨年の７月からスタートを切りました。路線設定だとか、それからどのくらい乗ってくれるかということを、最初は腰だめでやっておるということでございまして、私は事務局に対して「ばかなことをするな」と「きっちりとこのアンケートをとりなさい」ということでやったらアンケートをとったら大ざっぱなアンケートでございます。特に高校生の私は通勤バス、朝１便６時ころから出まして、川路まで特急便が出ます。そしてこれはクラブ活動に従事する生徒、もう１つは定時に行く生徒、２便、帰りも２便。そして温田へも阿南高校含めて全部で３便出しておるのか。そういうふうにやっております。

それでなおかつ下條村では、高校生の家庭、これはすぐ調べればわかるわけでございますが、「いかがでございますか、乗っていただけるでしょうか」ということでやりましたら残念ながら端的に言うならば、阿南高校へ行く生徒は１００人乗るぞという予告がありましたら２２人。これ１００人ということでなしに２２％でございました。とにかく恐ろしいことには飯田へ行くよということで、申し込みがあって、必ずとはいえんけれども、利用させていただくという中で、９％しか乗っていただかないと。これもただ広範囲にやったんでなくて、ピンポイントでやってそういう結果でございます。

これは今までの風習として、飯田方面は特に勤め人が多いわけでございますので、それに便乗していって帰りは相当乗ってくれるわけでございますけれども、例えば売木、新野、温田の線にはときには満員になってもう１台出すというようなこともあるわけでございまして、これは非常に難しい場面でございまして、この会議の席上ではすごく時間かかってしまうわけでございますので、今度４月から始まる一般の皆さんも乗れるバスの運行計画もできて、行きに２便帰りに２便でございます。そして最終的には飯田駅を通して飯田病院まで行くと。それまたそれを帰ってくるということでございますけれども、非常にきめ細かな計画を組んでおります。

さらには料金につきましても、今までの約半分、飯田行くに４００円くらいで行けるように組んでおるわけでございます。この予算を５，７００万円組んだわけでございまして、なんと料金として入るのが３７０万円。これは南部全体でございます。６．５％しか料金収入がないという中で、それでも公共交通ということで今取り組んでおるわけでございますけれども、これ２年間はまだ実証期間として補助金がありますけれども、これ補助金がなくなったときにさてどうするかということで、今から例えばこんな路線もうやめろというようなこともこれから実践の中で考えていかなければならないということでございまして、そんなことも一生懸命やっておるということで、細部にわたっては協議会の中でしっかりお答えし、またしっかり協議していただくということでお許しをいただいて、私の方からの答弁は以上にさせていただきます。

○議長（村松　　積）　６番、宮嶋清伸君、再質問ありましたら。

宮嶋清伸君。

○６番（宮嶋　清伸）　ただいま答弁の中で細かい点まで、また村長の感想も述べていただきな

がら話していただけたわけです。

公共交通網については、下條村というのは公共交通網というのはもうバスしかないというところの中で、どうしてもみんな自宅、みんなマイカーを利用してという形になってくるんで、ちょっと送っていくんだったらそれを使っちゃう、駅まで行っちゃおうというような方も多いと思います。

福祉バスとして村内も回っているバスとの連携ができればとか、そういうような話もあると思いますけれど、南信州広域連合としてまた考えていかなきゃいけないのかなと思っております。

そのほかで学力の関係で、先生たちも年々厳しくなって、先生が子供を見るよりも校長先生とか上から見られるということで大変だと思うんですけれど、やはり私は下條村の先生ということで村内に来ていただけるので、以前１回計画しておじゃんになっちゃったんですけれど、やはり村と先生たちとのそういう話し合う場というものも大事じゃないかな。なかなか教育と行政というのは別物だよという概念であると思うんですけれど、下條に来ていただいたら先生と行政、我々議会も腹を割って教育についてどういうふうな持っていきかたをするというようなのを腹を割って話す機会を設けていただきたいと思いますけれど、村長のお考えをお伺い願います。

○議長（村松　　積）　伊藤村長。

○村長（伊藤　喜平）　大事なことであろうと思います。

私先ほど申しましたように、学校の先生の指導力というのは、その人の持っている能力は当然限界があるわけでございますけれども、そこに情熱だとか近親感だとかいうものがあれば、ほとんど情熱で中学生くらいの学力だったら教えることができると思います。

特に昔よく有名な先生がおって、ほうきのあれでたたいたりいろいろして、それでも問題にならずというか、親が「かえってそのくらい厳しくしてくれ」という時代もあったことも、私自身の子供を振り返ってみる時に、あの先生いい先生だったなということが印象に残っておるわけでございますけれども、今はとにかくＰＴＡというのがありまして、なかなかその難しい時代でございます。先ほど申しましたように、権利は主張するんですけれども、義務だとか一般常識というのはどっかへ失ってしまっておるというようなことで、先生たちも非常のやりにくいと思います。

その中で今提案でございますけれども、実は教育の中立性、行政はタッチしてはいけない。私どもは冗談じゃない。私どもの教育、村づくりは教育の真ん中においておるんだよということで、お互いの立場を侵さないように、お互いに校長先生とディスカッションやっております。だから中学校の生徒会議会なんていうのは本当に迫力があって、この議会が迫力ないというんじゃなくて、本当にすごいもんでございます。ああしてディスカッションしておるうちに下條村づくりの予備軍に彼らはなって、高校へ卒業していくわけでございますけれども、ふるさとを知り、ふるさとを理解し、そこからふるさとを愛するという情熱が出た子は、私は親元から離れようが、下條村から離れようが、強く、正しく、たくましく生きていくと信じております。

そういうことでたくましくというと、今文武両道の話がありました。私も実はちょっと卒業式に飯田高校に行ってまいりました。３１６名だかいる堂々と入ってくるわけでございますけれども、大半が飯田高校は青っちょろい、「おい大丈夫かな」と勉強しすぎなような形の生徒が多いわけでございますけれども、その中であの３人は真っ黒でございまして、ブラジルかどっかから移民してきたんじゃないかというくらい真っ黒で、威風堂々としておって、まさに文武両道だなと私は感じました。

いろいろ聞いてみれば、クラブ活動をやる。そして短期間にやる。そして勉強は徹底して、寝る間も惜しんでやるそうでございます。それでまた頑張る。そして集中的に睡眠なんかは本当に短時間で回復してしまうという、このリズムを作ってしまって、今言ったように信大の医学部だとか、筑波大だとか早稲田。これがいいということでなしに、あれだけこの過激なラグビーをやっておっても、その志がというか、意思が強ければそういう形になるということで、新聞もああいうとらえ方は良かったなと思っております。

これからも先生方と校長先生を介して、この前ちょっとアプローチがありました、実は。小学校の校長様から「ちょっとやるように」と言っておって、校長様がそれから間もなく慣れんことしたら病んじゃったそうでございますけれども、これまた持続しながらやって、最初に議員の皆さんと一緒になって相手があんまりカリカリというかしちゃいかんので、そんなことも考えております。

もうそろそろ教育の本質というのを、本当にぶれなくて考えなければならない時代になっておることは確かでございます。財政破綻なんかすぐそこに来ておるわけでございます。

そのときには耐えるんだとか、自己責任で切り開いていくんだとか、みんな人のせいにするんでなしに、そうして総論ばっか言っておるんでなしに、俺はこのためにはこのくらい一歩踏み出してやるんだぞという生徒をつくらなければ、今の１億２，５００万人総論総評論家時代、評論家はもう必要ないわけでございまして、テレビ見ておっても２番底がくるんだ、３番底がくるんだ、景気はこの３年ばか前だとダウ平均３万円近くなるなんて、今１万５００円くらいでございます。その先生たちもしゃあしゃあとしてまた相変わらず反省の念もなく、それだけ経済というのは難しいもんでございますけれども、総評論家はもううんと少なくして、そして実働家、額に汗し、そして自ら垂範を示してやるという、下條村民のような形の人を大勢増やしていかないと、日本丸のこの財政破綻、財政規律なんていうのどっかいっちゃってない。誰かが助けてくれるような気がしておるわけでございますけれども、そんなに世の中は甘くないということでございますので、ぜひこの教育問題については私も危機感を持っておるということと同時に、１つの道を貫くという、こうしたちょっとやってみてまたぐらぐらしてみて、今度はこっち今度はそっち、そのうちに代議士も代表の衆が来てどんとことやるようになると、これは何のための教育かな。教育というのはもう少し神聖なものあると思います。党利党略だとか私利私欲に走る。職場保全に走るということでなくて、もう少しそれを超越したものであるから教師というのは聖職であるというふうに言われておるわけでございます。聖職もだいぶ影が薄くなってしまっては困るわけでございますし、その辺の変化は子供が一番先に受け取るわけでございますので、そんな話もまたしてみたいなと思っております。

以上です。

○議長（村松　　積）　６番、宮嶋清伸君、よろしいですか。